

〈原著論文〉

## ホームヘルパーの家族介護者支援に関する一考察

——インタビュー調査から見える妻への生活援助と夫への支援の連鎖——

松 本 眞 美\*

An Investigation into Home Helper Support of Family-member Caregivers :  
The Connection between Housework Assistance Services Offered to a Female Patient  
and the Support Offered to the Patient's Husband Shown in Interview Responses

Mami Matsumoto

**要旨**：介護保険制度下における訪問介護サービスでは、家族介護者支援は直接的なものとして存在しない。しかし、現場において、生活の場に応じた支援には家族介護者支援も含まれていると考える。それを可能とする訪問介護員（ホームヘルパー、以下、ヘルパー）の実践について考察するために、利用者本人とその家族介護者がヘルパーに求める支援に関するインタビュー調査を行った。協力者は70代の妻とその家族介護者の夫である。それぞれの逐語録をSCATにより分析した結果、「本人と家族介護者とヘルパーの関係性からみる自立への回復プロセス」と、「家族介護者の人生観が他者との関係性の中で変化へと至るプロセス」のストーリー・ラインが得られた。それらを可能とする「生活援助をすることにより家族の関係性に変化をもたらすヘルパーの存在意義」が示唆された。

**Summary** : Direct support for family-member caregivers is not provided as part of home-visit care services under the long-term care insurance system. In the field, however, such support may be given to family members caring for patients, depending on the patient's living situation. In order to examine practical considerations for home helpers who visit patients in their own homes to provide care (hereafter, "helpers"), interviews were conducted with a patient using the service and a family member who was also providing care regarding the support they required from helpers. The patient was a female in her seventies, and the family-member caregiver was her husband. Word-for-word transcripts of the interview responses were analyzed via the Steps for Coding and Theorization (SCAT) method. The results of this analysis revealed two processes, one where the patient was able to recover some independence as a result of the interaction between patient, family-member caregiver and helper. The other showed the family-member caregiver's outlook on life change through their interaction with others. The answers suggest that what made these processes possible was the important role played by having helpers who could change the relationship between and with the patient and family-member caregiver by providing housework assistance services.

**Key words** : Home helper ホームヘルパー housework assistance services 生活援助サービス support for family-member caregivers 家族介護者への支援 married couple system 夫婦システム life model 生活モデル

### I. 研究の背景と目的

#### 1. 介護保険制度における訪問介護の生活援助

2015年、訪問介護の要支援者に対する生活援助サービスは「介護予防・日常生活支援総合事業」の生活支援

サービスへと移行された<sup>1)</sup>。加えて、国は、要介護者に対する生活援助における時間の短縮<sup>2)</sup>、訪問回数の上限<sup>3)</sup>など身体介護を中心としたサービス提供の流れとなりうる改正をも行なってきた。自立支援や重度化防止を担っている訪問介護の神髄ともいえるべき生活援助サービ

受付日 2020. 5. 20 / 掲載決定日 2020. 10. 7

\*関西福祉科学大学大学院 研究員

スに関するこれらの改正は、利用者や家族介護者にとって有益なものであるのか疑問である。赤塚<sup>4)</sup>は、新たに出来る生活支援サービスに従事するスタッフが無資格であることに懸念を示している。

介護保険制度の訪問介護サービスは、身体介護と生活援助に大別され、そのサービス行為ごとの区分が、厚生労働省の「訪問介護におけるサービス行為ごとの区分等について」(2000年3月17日付厚生省老人保健福祉局通知老計10号)<sup>5,6)</sup>により通知されている。対象者は、要介護1~5、要支援1・2と区分されサービスが行われている。赤塚は、「生活とは、人間が人間らしく生きるための諸欲求の充足過程であり、連続している」とらえる<sup>7)</sup>ものだと示し、総合的な生活理解とは、「生活の当事者の生活に寄り添い、当事者がどうしたいのかという生活の主体が生活を考え生活するということであろう」と述べている<sup>7)</sup>。又、田中は、訪問介護の中の「生活援助」について、「生活を維持していくのに不可欠な家事の重要性をクローズアップさせ要介護状態に置かれている個人のみならず家族全体の生活に隙間なく連続的にかかわり、そのことが、家族全体の生活者としての安心や満足の基盤になる」と述べている<sup>8)</sup>。この生活援助が専門性を持った支援であるかの議論について、八田<sup>9)</sup>、は利用者ヘルパーへの調査を通して、生活援助サービスが単なる家事の代行業務にとどまらない専門性を要するものであるとしている。矮小化されていく「生活援助」サービスの必要性を問うていくことは利用者、家族にとっても有益なことであると考ええる。

## 2. 「介護の社会化」と家族介護者支援

介護保険制度における家族介護者の支援については、2012年に、菊池<sup>10)</sup>がその政策動向について述べてからも大きく変動していない。近年では、柴崎<sup>11)</sup>が家族介護者支援の現状と課題について介護保険事業計画を手がかりにし、地域包括ケアシステム研究会報告書の記述内容の変化について、2009年には、「家族介護支援」という言葉は登場せず、2010年、2013年以降、家族支援に目が向けられるものの、2017年の報告書では「自助」「互助」への期待となっているのみでトーンダウンしていると整理している。介護保険制度における「介護の社会化」について、藤崎は、再家族化を懸念し、『「介護の社会化」や「高齢者の自立支援」の理念は大きく後退し、サービス提供の目的が家族介護の後方支援へとすり替えられている」と述べている<sup>12)</sup>。同様に、中野は、「家族介護が過小評価され、無償の”含み資産”になるとすれば、かつての日本型福祉社会の時代に逆行することになる」と危惧し、「利用者主体の制度であることは基本

としながらも介護保険制度に希薄となっている家族介護の評価の視点は今後も必要であると考え」と述べている<sup>13)</sup>。

家族介護者の介護負担に関する文献も多く見られ<sup>14,15)</sup>、日本においてはまだ、家族介護者支援に関する政策は有効なものとなっていないのではないかと考える。介護保険制度では、施設・通所・レスパイトケアサービス等が明確に家族介護者支援と位置づけられているが、他のサービスで家族介護者支援と位置づけられているものはない。そのような介護保険制度のなかにある訪問介護の持てる機能の再確認と可能性について考察することは、今後の家族介護者支援の検討のためにも、意義あることと考える。

## 3. 研究目的

介護保険制度に組み込まれ、制度枠内にある訪問介護であるが、訪問介護自体が持つ機能等についてはあまり研究されていない。ホームヘルプの「本人を主体としながら、本人と家族の生活の維持・回復・発達を援助することの有効性<sup>16)</sup>」の検討や、「アセスメントの共通点<sup>17)</sup>」などへの着目から、ホームヘルプはソーシャルワーク機能を担っているのではないかとする文献等がある<sup>18,19)</sup>一方で、ホームヘルプは無資格者でもできるという認識も存在する。近年においては、ホームヘルプの機能が制度から乖離しているのではないかと考える。安井は、『「当事者の視点」から自立や自己実現を目指すようなソーシャルワークは、付加価値としてどんどん痩せ細っていく危険性を制度自体がはらんでいるといえるのかもしれない」と述べ、福祉サービスの変質を「新しい医学モデル」と名付けている<sup>20)</sup>。そのような変質は、訪問介護においても起こっているのではないかと考える。訪問介護自体が持つ機能等について再確認していくことは、利用者のみならず、支援者にとっても支援方法についての再考になると考える。

生活援助サービスの有用性、それを可能とするヘルパーの実践を明らかにするにあたっては、専門的な支援の有無が問われるだろう。ヘルパーの実践についての考察においては、「理論的に生成された枠組みでは測り切れない部分に、ホームヘルパーの専門性を見出すなら、その検証にはより実践応用的な枠組みが必要」である<sup>21)</sup>と考えるが、そのような検証はまだ少ない。生活者としての利用者本人・家族介護者のニーズと、ヘルパーの実践との関係に焦点をあて帰納的な調査を行うことは、演繹的ではない方法であるからこそ実践応用的な枠組みの探究に寄与できるのではないかと考える。

本研究の目的は、介護保険制度下にあるヘルパーの具

体的な生活援助サービスの事例を通して、利用者本人と家族介護者が在宅生活継続のために必要とするヘルパーの支援についてのニーズを明らかにした上で、ヘルパーの支援の意義について考察することである。

## II. 研究方法

### 1. 研究視座

本研究においては、量的調査によるニーズの一般化を必要としない。利用者や家族介護者から得られる新たな現象の発見が本研究の知見となる。そのため質的研究法を採用し、インタビュー調査を行うこととした。大谷は「分析に用いる枠組みを『分析的枠組み』と呼び、その分析的枠組みとして概念を用いるものを『概念的枠組み』、理論を用いるものを『理論的枠組み』と呼ぶ<sup>22)</sup>」としている。

訪問介護を行なうということは、協力者である夫婦システムの中にヘルパーが入るということになる。そのことによる関係性の変化等を軸に考察することが可能ではないかと考えた。そこで本研究の概念的枠組みを、人と環境との交互作用の中の適応という概念に集約される「生活モデル」とした。夫婦がお互いを環境として捉えている可能性、またヘルパーとの関係においても枠組みとして採用することは有効だと考えた。分析には、「問題を病理の反映としてではなく、他人や、物・場所・組織・思考・情報・価値を含む生態系の要素の中の相互作用の結果として捉える<sup>23)</sup>」生活モデルの交互作用を分析的枠組みとして行うこととした。

なお、ここで述べる交互作用 (transaction) と相互作用 (interaction) は、一般的な概念ではない。ジャーメインは、相互作用を「一つの存在が他の一つ以上のものに影響を与えるときの直線的な因果関係の一形態」であり、交互作用を「『人間：環境』の中間面において、相互的な因果関係をもたらす循環円フィードバック過程である」とする<sup>24)</sup>。本研究では、一方に影響を与える直線

的因果関係の相互作用ではなく、お互いに影響し合う円環的思考の交互作用を使用する。

### 2. 実施方法

半構造化インタビューは、2018年7月に実施された。協力者は介護保険制度の利用者本人 A 氏とその家族介護者である夫 B 氏の2名である。選定は、有意抽出法縁故法を採用した。協力者概要については、表1に示した。本人とその家族介護者が語るヘルパーについては、交代で数名のヘルパーが訪問していたが、主に訪問していたヘルパーについて記載している。インタビュアーは筆者である。なお、A 氏及び B 氏に登場するヘルパーは筆者ではない。

本人や家族介護者に、支援に対する思いについて、個別の内容を自由に語っていただくことを目的としたため、インタビューガイドを作成し、半構造化インタビューを実施した。質問は、「ヘルパーに何ができるか」「困っていることがあってヘルパーにしてほしいこと」等「ヘルパーに望む支援について」である。本人、家族介護者へのインタビューは、それぞれ29分、45分であった。それぞれ具体的に自由に語っていただいた会話は、協力者の同意を得て IC レコーダーに録音し逐語録にした。

### 3. 倫理的配慮

インタビュー実施にあたっては、協力者に研究目的・方法、匿名性の保持、守秘義務の厳守、録音の許可、結果の公表についての説明を口頭と文書で行い同意を得た。研究経過中においては、インタビューを逐語録にしたデータの使用可能な部分について、分析経過について、結果の公表について、それぞれその都度協力者と面談し、同意を得ている。本研究は所属大学の倫理委員会にて承認 (番号 17-21) を受け、日本社会福祉学会研究倫理指針に則って実施した。

表1 協力者概要 (インタビュー実施は2018年)

<p>・本人 A 氏：女性、70代、A 県在住。夫と二人住まい。子どもは他市在住。要介護2。5年前くらいからうつ病の為、入退院を繰り返し精神的にも不安定となり、要介護状態となる。2年前には別の疾患の手術の影響で左肩の可動域が小さくなる。健康面での不安や日中独居のため、通所介護 (3/w)、訪問介護 (2/w)、有料サービス (掃除：2/w)、配食サービス (2/w) を利用している。</p> <p>・訪問介護のサービス区分・所要時間は (身体2生活1) 80分を週に2回</p> <p>サービス内容／調理 (ADL 維持のための自立支援)、買い物代行、必要に応じて掃除</p>
<p>・夫 B 氏：男性、70代、自営業、腰の圧迫骨折等あり。病気の妻が日中独居で心配なため、サービス利用することで安心している。家事をすることが少なく、自身も体調がすぐれない時があり、介護軽減となるサービスを利用しながら、主たる介護者として妻に寄り添って介護を続けている。がんこな昔かたぎな仕事人だと話している。自営業は忙しく、家を空ける時間が長い。妻の定期的な通院等に同行している。</p>
<p>・ヘルパー C 氏：女性、60代、保有資格は介護福祉士・ヘルパー2級、ヘルパー経験年数7年</p> <p>・他にも交代で訪問するヘルパー有り</p>

4. 分析方法

1) 分析方法は、データを理論化するにあたり、質的データの分析手法として、大谷<sup>25)</sup>の SCAT を採用した。『「表層のできごとの記述」であるテキストを『深層の意味の記述』であるストーリー・ラインとするシーケンス分析<sup>26)</sup>』は、協力者の会話の深層にある意味を表出する上で最も適していると考えた。具体的な文脈の中にある表層のエピソードを、順に深層の意味の記述へと分析し再構成していくことで、語りをより客観的に解釈できる可能性がある。

大谷は「SCAT では、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の注目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのテキスト外の語句、〈3〉それを説明するようなテキスト外の概念、〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念、の順にコードを考えて付していく 4 段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である」と説明している<sup>27)</sup>。明示的で段階的な分析手続きを有するこの分析方法に従い〈1〉から〈4〉を行い、ストーリー・ラインを記述した。なお、分析の表については、紙幅の許す限り分析の全体を掲載できるように努めたが、一例を示すのみとなった。SCAT を用いた研究の先行文献<sup>28-30)</sup>においても一例として一部を掲載しているのみであったため、それにならった(表 2・3)。又、ストーリー・ラインに埋め込まれているものが理論記述となるので、同じ内容であるストーリー・ラインの記述については、表 2・3 の中においては省略し、本文内で示すのみとした。

2) SCAT は概念を図式化する分析ではなく「データの流れに沿ってコーディングを行うシーケンス分析の特徴を強く有するもの」であるため、図式化するもの

はないと大谷は述べているが、同時に、SCAT での分析終了後に「そこで得られた〈4〉をそのような方法で分析し直してみる」ことも可能だと述べている<sup>31)</sup>。それに従い、得られた〈4〉について図式化し、分析内容の妥当性についても検討することとした。

図式化にあたっては、まず、『深層の意味の記述』として浮かび上がった〈テーマ・構成概念〉をその過程ごとに整理し、便宜上ストーリー・ラインの一文、〈テーマ・構成概念〉ごとにそれぞれ連番を設けた。次に、ストーリー・ラインの〈テーマ・構成概念〉を類似したカテゴリに分けた(表 4・5)。

語りは本人、家族介護者が混在したものも見られ、それらは『深層の意味の記述』となっているため、明確に分けることは出来ないが、ストーリー・ライン一文ごとに、本人・家族介護者の語りから得られた、本人、家族介護者の〈テーマ・構成概念〉であることを前提に大別し、図式化した(図 1)。具体的に本人、妻、夫と記載されることもあるが、それらは、〈テーマ・構成概念〉についての検討の助けとなると考え、追記したものである。あくまで SCAT による分析はストーリー・ラインに基づく理論記述である。

分析に当たっては、客観性を担保するため、SCAT の経験を有する家族介護者ケアについて研究している大学院研究科の研究生、臨床福祉学専攻に在籍する大学院生等 6 人をメンバーとして行った。また、大学院において質的研究法を教授する教員による助言を受けている。本人と家族介護者の分析時間は延べ 61.5 時間であった。

Ⅲ. 分析結果

1. ストーリー・ラインの記述

インタビュー結果の逐語録を大谷の方法に従って分析した。分析表の一部について例示した。

表 2 SCAT による分析の一例 (分析対象者 A 氏)

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言いかえ	〈3〉左を説明するようなテキスト外の概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
(略)							
195	A 97	楽しくお話させていただくことですね。	楽しくお話させていただくこと	人と過ごす	人との関り(結果)	会話による交流	
199	A 99	やっぱり、私好みの薄味のね、食事をね、作っていただくということ。このね、私の要求ね、「こんなぐらいのものを作ってください」とか、「言ってほしい」とおっしゃるから、ちゃんとその通りしていただきますし、意思疎通ができるのだと思いますね	意思疎通ができるのだと思います	強固な関係性	満足感(結果) / 安心感(結果)	関係性の継続	自分好みの料理を理解してもらえていることの満足感? 関係性があることがうれしい?
201	A 100	そう、そうです。すぐできた。すぐ。誰とでもすぐに。あばうとな人間やから。	誰とでもすぐに。あばうとな人間やから。	気にしない	誰とでも合わせられる(背景)	性格による良好な関係性	そんな自分だから、関係性はすぐできたという自負、自信? / 以前の自分に戻ってきた?

松本真美：ホームヘルパーの家族介護者支援に関する一考察

207	A 103	・・・ま、私にね、お皿拭いたり、包丁研いだり、さしていただくから、私も一緒にお仕事してる感じになりますのでね、うん	私も一緒にお仕事してる感じになります	役に立っている	やりがい(結果)	一緒にできる喜び	誰でもいいのか？来てくれる人であれば(話が合うが条件)／自立支援
209	A 104	一人の時は、なにもせえへん。	一人の時は、なにもせえへん。	一人の時の過ごし方	めんどくささ(背景)	他者の存在／活力の元	ヘルパーが来たときは一緒に作る？
219	A 109	私が主人の食事を作るようになりました。	私が主人の食事を作るようになりました。	妻の仕事の復活	喜び(結果)	自己効用感	
221	A 110	それは一食だけで、昼は作っていただいて、夜はわたくしが、作ります。ヘルパーさんが来ないときは、朝はパンが多いですから、お昼と夜は、私が作ります。	夜は、わたくしが作ります。	自分の役割	ヘルパーとの役割分担(背景)	役割遂行	制度利用と自己効用感がマッチした？／サービスをどのように使おうかと考えている？／デイでの役割分担はどう？
223	A 111	だいたい、これとあれと、って考えて。瞬間的に。年ですから。	瞬間的	すばやく	速い判断(特性)	自身の可能性への期待	
239	A 119	ま、今のままのヘルパーさん、続けてきていただいたら、うれしいです。私もお手伝いさせていただくので。よろしくということです。	私もお手伝いさせていただくので	一緒にすること	自分の力の意義(背景)	役立ち感	
(略)							
	理論記述	<p>・ヘルパーの能力の見極めや、人に合わせる効果は、構築された関係性や、ヘルパーとの協働体制を作る。／・日常にある安心感と感謝は、自身の貢献も含め、相互交流できる会話から生まれる。／・ヘルパーの迎え入れ方、流儀など、来客者へのおもてなしは、自身の心配で行い、あるじとしての接待意識や、気構えが自身の存在意義をもたらす。／・継続される日課は、予定のある安心感となり、夫の体調への気遣い、夫不在の不安、先行きの心配を行きつ戻りつしながら、夫に依存していない私を作る。／・おしゃべり=充実感であり、人との関りの充実感、自身の貢献の再認識となり満足感となる。／・表裏のない性格は、甘受する自身の性格として、会話による交流を活発にし、関係性の継続に貢献する。／・性格による良好な関係もあり、ヘルパーらと一緒に出来る喜びや、他者の存在が活力の元となる。／・自己効用感となる役割遂行は、役立ち感と自身の可能性への期待となる。／・夫への依存と信頼は、夫の存在による安心感と共に、自立と依存の均衡をもたらす。</p>					

SCAT (Steps for Coding and Theorization) を使った質的データ分析

注：表2はA氏データの分析過程の一部である。

表3-1 SCATによる分析の一例(分析対象者B氏)

番号	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目すべき語句	(2)テキスト中の語句の言いかえ	(3)左を説明するようなテキスト外の内容	(4) テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5) 疑問・課題
(略)							
12	B 6	安心です。そうですね、助かりますね。まず、一つは、おかずを何種類か作っていただきますんでね。私と家内二人だけでしたですから、家内はまだましなんですけどね、私なんか、余計に自分の好きなもんしか食べませんからね。(笑) ヘルパーさんはいろんな種類で、お魚を使ったり、お肉を使ったり、そういうことで、いろんなもん食べさせていただけるんで、楽しみです。	安心です／助かります	気が楽／してもらえる用事／感謝	負担軽減(結果)	家事代行への期待	家事だけをしてもらえばいいのか？期待の中身は？
14	B 7	いやあ、家内からも実際の会話で、あんまり聞いたことないんですけどね。	家内からも実際の会話で、あんまり聞いたことない	妻の言いたいこと／知らない妻の話の内容	自立(原因)／無関心(原因)	不明な要望	
16	B 8	だから、・・・彼女も結局、そういうかたとお話することによって元気になってるのは事実でしょうね。わたしたちもほとんど、会話が猫の話か孫のことしかありませんのでね。	お話することによって元気になってるのは事実でしょう	話が元気のもと	他人との会話(背景)	会話による生活の活性化	夫のしないこと、守備範囲外？
22	B 11	うん、今日はこんな話したとかね、そういうことは、よくその日の晩に言うんですけど。まあ、私、こっちからあっちで。はははは	今日はこんな話したとか／私、こっちからあっちで	聞き捨て	無関心(原因)	他愛もない話	他愛もない話→ヘルパーとの些細な話⇔重要な話じゃない【だけどこれが元気の素】／誰でもいいのではなくヘルパーだから意味がある
24	B 12	そうですね。はい。やっぱり、デイサービス行くと結構楽しいみたいなんですけど、まあ、デイサービスの場合ですと、まあ、いわば与えられていることもありますよね。が、その、ヘルパーさんだったら、ある意味、一対一で、いろんな話ができますでしょ。そういう意味では、結構いいんじゃないかなと思ったりしてます。	与えられている／一対一／結構いいんじゃないかな	受け身／能動、対等／満足	サービス形態の違い(特性)／安堵(結果)	推察する妻の要望	↓ 1対1であればだれでもいい？

26	B 13	うーん、・・・生活が・・・変わるというよりも、彼女自身が、最近では、刺激されてるかどうか分かりませんが、おかずも少し自分で作ってくれるようになったりね。	作ってくれるようになったり	自主性の変化	意識の変化 (原因)	妻の回復	自主性、主体的、言葉の定義
28	B 14	はい、うん、なってくれましたんで、そういう意味では、ヘルパーさんの力は大きいのかと思ったり、	ヘルパーさんの力は大きい	影響力	良好な変化 (結果)	ヘルパーの効果	
(略)							

表 3-2 SCAT による分析の一例 (分析対象者 B 氏)

番号	発話者	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言いかえ	(3) 左を説明するようなテキスト外の概念	(4) テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	(5) 疑問・課題
(略)							
34	B 17	今までコンビニとか、スーパーでね、出来合いのもの、僕はそういうのしか買いませんのでね。そういうのを食べてたんですけどね。まあ、やっぱり、長い間、家内の食事を食べてましたんで、そういう意味では、なんとなく自分の中では、ほっとするんですかね。	出来合いのもの / 家内の食事 / ほっとする	口に合わない味 / 口に合う味 / 安心	我慢 (背景) / 喜び (結果)	待ち焦がれる妻の再生	主婦として? / 妻として?
38	B 19	それと、もう一つは、私も、もう年ですんで、家内もそこらへんを気を付けてくれて、いわゆる塩辛いものは、できるだけ、避けるようにしたりと、してくれてるんですよ。出来合いのバックは味が結構濃いですわ。	家内もそこらへんを気を付けてくれて	妻の気遣い	喜び (結果) / 感謝 (結果)	夫の喜びとなる妻の再生	
40	B 20	そうなると、まあ、よくやってくれるなど。	よくやってくれる	思いのままの作業 / ありがたいこと	妻の復活 (原因) / 感謝 (結果)	妻の復活	復活、再生、定義は? 違いは?
42	B 21	・・・だから、ある意味、・・・ヘルパーさん、食事作るかた、○○○が来てはるんやろ?。(B 氏奥様に語りかける。A 氏: うん) それ以来、料理する回数、増えました。	料理する回数、増えました。	台所にいる長い時間	妻の復活 (原因)	妻の存在の確認	存在の確認: 見えなかったものが見えるようになってきた / 存在の確認ができた → ヘルパーがいることでその存在が浮かびあがる、/ ひとり、ただけでは存在は確認されにくい? / 家事をする妻が妻? / 家事をする妻、というのはきっかけにすぎない、存在自体を受け止めているのではないか
44	B 22	前のかたには作っていただくという甘えがあったんでしょね。今度のかたはお若いので、自分がまけたらいかんと (二人笑う)	甘え / まけたらいかん	依存心 / 競争心	頼りがい (背景) / 自立 (結果)	依存から自立への変化	昔はできた、病気の時はできなかった、今はできるようになってきた / 家事をする妻としてのとらえかたではなく、妻のすべてを受容している。良い時もしんどい時も併せて。
48	B 24	そう、病気になって、何年になるのかな。結構たつんですが、うーん、結局、ほんとにひどい時は何もできなかったんですね。	ひどい時は何もできなかった	以前の悪い状態	解決できないものがき	苦しい状況	
50	B 25	で、ここ一年くらいかな、結構、元の家内に戻ってきましたね。	元の家内に戻ってきましたね。	妻の復活	安堵 (結果)	生活の再生	妻の再生、復活 → 生活の再生?
56	B 28	かわいそうなのは、彼女がかわいそうなのは、私がなんにもできませんのでね。(A 氏: それが問題やねん)	かわいそう / 私 / できませんので	憐れ / 無力	もどかしさ (結果)	自責の念	
58	B 29	全然出来ないですよ。(三人笑う) (A 氏: 出来ない) 何もできませんねん。するのは炊飯器でご飯炊くぐらい。私ぐらいの年ですとね、私の親もそうですし、私の姉も、家内の姉もそうなんですが、男は台所に入らない、という時代だったんですわ。	男は台所に入らない / という時代だった	台所仕事をしない男 / 世間の常識	責任転嫁 (結果)	言い訳	

66	B 33	料理はね、結局、私らね、老人、老夫婦ですんで、それを考えていただいていると思うんですが、結構、薄味です。	老夫婦／薄味	配慮が必要な世代／健康志向	気配り（背景）	行き届いた配慮	
68	B 34	安心して食べれます。	安心して食べれます。	信頼できる食事	健康への配慮（背景）	感謝	
(略)							

表 3-3 SCAT による分析の一例（分析対象者 B 氏）

番号	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目すべき語句	(2)テキスト中の語句の言い換え	(3)左を説明するようなテキスト外の概念	(4) テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	(5) 疑問・課題
(略)							
184	B 92	そうなんです。私、そういう意味で、H といふところでお弁当を頂戴してたんですね、月木土と。そのときに受付のかたの対応も、その、われわれのようなビジネスライクなやりかたではなくてね、気持ちに寄り添うような感じでお話していただけますんで、ま、そこらあたりが大きく変わった原因でしょうね。	気持ちに寄り添うような感じで大きく変わった原因	そばにいてくれる安心感／変化の理由	寄り添い(影響)	認められる満足感／他者の介入	仕事一筋から、人のやさしさに感謝出来るようになってきた→変化／新しい感覚の気づき、今までにない経験、影響を与えられる、琴線に触れる、広がる。。。
186	B 93	ありますね、そうです。ほんとににこっとしましたね。気持ちが和むというかですかね。	気持ちが和む	幸せな気分	環境への感謝(背景)	安心感	
188	B 94	頭はね、仕事のことがばっかりなんです	仕事のことがばっかり	一生懸命	仕事以外のことは無関心(原因)	意識の広がりなさ	
194	B 97	ですからその人と話をしていて、アー、こんな世界もあるんだと。	話をしていて、アー、こんな世界もあるんだと。	対話による世界の広がり	未知の世界への扉（結果）	他者とのかかわりの重要性の認識	夫の救われた原点は、優しく接してくれた H の職員。心を変えてくれた。ヘルパーもこの時点で関わっている。いろんな場面での相互作用か？
198	B 99	だから、いつも、きりきりしてたんです。はは	いつも、きりきりしてたんです。	切迫感	焦りと辛さ（結果）	余裕のなさ	
200	B 100	大きいですね。家内には悪いですけども、家内の病気のおかげで（二人笑う）で、彼女はほんとに元気になってきたんで、それも気持ちの中では助かってます。	家内の病気のおかげで	妻への感謝	新たな出会い(理由)	世界の広がり	スタッフのおかげ／妻のおかげ
(略)							
理論記述		<p>・ヘルパーとの関係がもたらす安定した生活を求め、関係継続の期待をしている。／・家事代行への期待もあるが、妻の不明な要望は、他愛もない話が妻の回復となっていることから、推察する妻の要望は会話による生活の活性化であるとする。／・ヘルパーの効果は、年配者としての役割の自覚や、主婦としての再生に現れる。／・待ち焦がれる妻の再生は夫の喜びとなる妻の再生であり、妻の依存から自立への変化は妻の復活であり、妻の存在の確証となる。／・苦しい状況からの生活の再生は、自責の念や言い訳を持つ妻不在による困惑の夫を、見えてきた希望のもと、妻の復活を喜ぶ夫へと変化させる。／・ヘルパーとの良好な関係や、行き届いた配慮への感謝は、介護の重圧を、重圧からの解放へと変化させ、遠い所にある福祉に対する認識も、変化の受け入れにより転換する。／・ヘルパーへの同情、ヘルパーへの敬意も生まれ、転換が及ぼす喜びの中、ありふれた生活を望む。／・経験知を超えた感謝が生まれ、時間の経過と自身の変化への気づきにより、変換した価値観を得る。／・夫の内省と妻がもたらす好影響は、自認する変化と妻からの恩恵により、人生観の変化となる。／・充足された依存心と介護代替者の存在は、他者の介入により、認められる満足感と、安心感となる。／・仕事一辺倒だった意識の広がりなさは、他者とのかかわりの重要性の認識へと変わる。／・余裕のなさから世界の広がりへと変わるのは、暗闇の中に差し込む光のように差し伸べられた手によってである。／・責務と覚悟は人生の転換を後押しし、意識の変化による効果をより大きくする。／・選択の重みは見通しのある道筋によって、昇華した感謝の念を伴い、強固な決意となる。</p>					

SCAT (Steps for Coding and Theorization) を使った質的データ分析  
注：表 3 は B 氏データの分析過程の一部である。

ストーリー・ラインは、SCAT による分析表の〈4〉「テーマ・構成概念」をつないだものであり、シーケンスの流れのまま記述し補助の言葉を加えている。

1) 本人のストーリー・ライン

ヘルパーの能力の見極めや、人に合わせる効果は、構築された関係性や、ヘルパーとの協働体制を作る。日常にある安心感と感謝は、自身の貢献も含め、相互交流で

きる会話から生まれる。ヘルパーの迎え入れ方、流儀など、来客者へのおもてなしは、自身の采配で行い、あるじとしての接待意識や、気構えが自身の存在意義をもたらす。継続される日課は、予定のある安心感となり、夫の体調への気遣い、夫不在の不安、先行きの心配をきつ戻りつしながら、夫に依存していない私を作る。おしゃべり=充実感であり、人との関りの充実感は、自身の貢献の再認識となり満足感となる。表裏のない性格は、

甘受する自身の性格として、会話による交流を活発にし、関係性の継続に貢献する。性格による良好な関係もあり、ヘルパーらと一緒に出来る喜びや、他者の存在が活力の元となる。自己効用感となる役割遂行は、役立ち感と自身の可能性への期待となる。夫への依存と信頼は、夫の存在による安心感と共に、自立と依存の均衡をもたらす。

2) 家族介護者のストーリー・ライン

ヘルパーとの関係がもたらす安定した生活を求め、関係継続の期待をしている。家事代行への期待もあるが、妻の不明な要望は、他愛もない話が妻の回復となっていることから、推察する妻の要望は会話による生活の活性化であるとする。ヘルパーの効果は、年配者としての役割の自覚や、主婦としての再生に現れる。待ち焦がれる妻の再生は夫の喜びとなる妻の再生であり、妻の依存から自立への変化は妻の復活であり、妻の存在の確証となる。苦しい状況からの生活の再生は、自責の念や言い訳

を持つ妻不在による困惑の夫を、見えてきた希望のもと、妻の復活を喜ぶ夫へと変化させる。ヘルパーとの良好な関係や、行き届いた配慮への感謝は、介護の重圧を、重圧からの解放へと変化させ、遠い所にある福祉に対する認識も、変化の受け入れにより転換する。ヘルパーへの同情、ヘルパーへの敬意も生まれ、転換が及ぼす喜びの中、ありふれた生活を望む。経験知を超えた感謝が生まれ、時間の経過と自身の変化への気づきにより、変換した価値観を得る。夫の内省と妻がもたらす好影響は、自認する変化と妻からの恩恵により、人生観の変化となる。充足された依存心と介護代替者の存在は、他者の介入により、認められる満足感と、安心感となる。仕事一辺倒だった意識の広がりなさは、他者とのかわりの重要性の認識へと変わる。余裕のなさから世界の広がりへと変わるのは、暗闇の中に差し込む光のように差し伸べられた手によってである。責務と覚悟は人生の転換を後押しし、意識の変化による効果をより大きくする。選択の重みは見通しのある道筋によって、昇華した

表 4 本人 A 氏の (テーマ・構成概念)

	【もともとある妻の意識】	(妻の意識)			【期待するもの】
		【夫との関係】	【ヘルパーとの関係】	【妻の再生】	
1	4. 人に合わせる効果		1. 能力の見極め 2. 構築された関係性		3. ヘルパーとの協働体制
2			6. 感謝 7. 自身の貢献		5. 日常にある安心感 8. 相互交流できる会話
3			9. ヘルパーの迎え入れ方、流儀 10. 来客者へのおもてなし 11. 自身の采配 12. あるじとしての接待意識 13. 気構え	14. 自身の存在意義	
4		17. 夫の体調への気遣い 18. 夫不在の不安 19. 先行きの心配 20. 夫に依存していない私			15. 予定のある安心感 16. 継続される日課
5				23. 自身の貢献の再認識 24. 満足感	21. おしゃべり = 充実感 22. 人との関りの充実感
6	25. 表裏のない性格 26. 甘受する自身の性格				27. 会話による交流 28. 関係性の継続
7	29. 性格による良好な関係				30. 一緒に出来る喜び 31. 他者の存在 32. 活力の元
8				33. 自己効用感 34. 役割遂行 35. 自身の可能性への期待 36. 役立ち感	
9	37. 夫への依存と信頼	39. 夫の存在 40. 安心感		38. 自立と依存の均衡	

感謝の念を伴い、強固な決意となる。

## 2. ストーリー・ラインの図式化

まず、本人のストーリー・ライン9つの文章を1文ずつ、テーマ・構成概念の類似するカテゴリに分けた。最終的にインタビューの質問項目である「ヘルパーの望む支援について」語られているカテゴリとして【期待するもの】、それぞれの関係性を示すカテゴリとして【夫との関係】【ヘルパーとの関係】、妻の意識の変化を

示すカテゴリとして【妻の再生】【もともとある妻の意識】の5つとなった。次に、家族介護者のストーリー・ライン14の文章について、同様の作業を行った。家族介護者については、【期待するもの】以外のカテゴリは人生観を時系列に語るものであったため、過去の状況としての【膠着したシステム】、現在の状況を示す【人生観の変化】【妻の再生】の4つになった。それらは表4、表5に示した。

最後に、「本人・家族介護者のストーリー・ラインと

表5 家族介護者B氏の〈テーマ・構成概念〉

	【膠着したシステム】	【妻の再生】	【人生観の変化】	【期待するもの】
1				1. ヘルパーとの関係 2. 関係継続の期待 3. 安定した生活
2	5. 不明な要望 9. 推察する妻の要望	8. 妻の回復		4. 家事代行への期待 6. 会話による生活の活性化 7. 他愛もない話
3		11. 年配者としての役割の自覚 12. 主婦としての再生		10. ヘルパーの効果
4		14. 夫の喜びとなる妻の再生 15. 依存から自立への変化 16. 妻の復活 17. 妻の存在の確証		13. 待ち焦がれる妻の再生
5	18. 苦しい状況 20. 自責の念 21. 言い訳 22. 妻不在による困惑の夫	19. 生活の再生 24. 妻の復活を喜ぶ夫	23. 見えてきた希望 25. 変化	
6	29. 介護の重圧 31. 遠い所にある福祉に対する認識		28. 感謝 30. 重圧からの解放 32. 変化の受け入れ 33. 転換	26. ヘルパーとの良好な関係 27. 行き届いた配慮
7		34. ヘルパーへの同情 35. ヘルパーへの敬意	36. 転換が及ぼす喜び	37. ありふれた生活
8			38. 経験知を超えた感謝 39. 時間の経過と自身の変化への気づき 40. 変換した価値観	
9		42. 妻がもたらす好影響 43. 妻からの恩恵	41. 夫の内省 44. 自認する変化 45. 人生観の変化	
10				46. 充足された依存心 47. 介護代替者の存在 48. 他者の介入 49. 認められる満足感 50. 安心感
11	51. 意識の広がり のなさ		52. 他者とのかかわりの重要性 の認識	
12	53. 余裕のなさ		54. 世界の広がり 55. 暗闇の中に差し込む光 56. 差し伸べられた手	
13			57. 責務と覚悟 58. 人生の転換 59. 意識の変化による効果	
14	60. 選択の重み		62. 昇華した感謝の念 63. 強固な決意	61. 見通しのある道筋

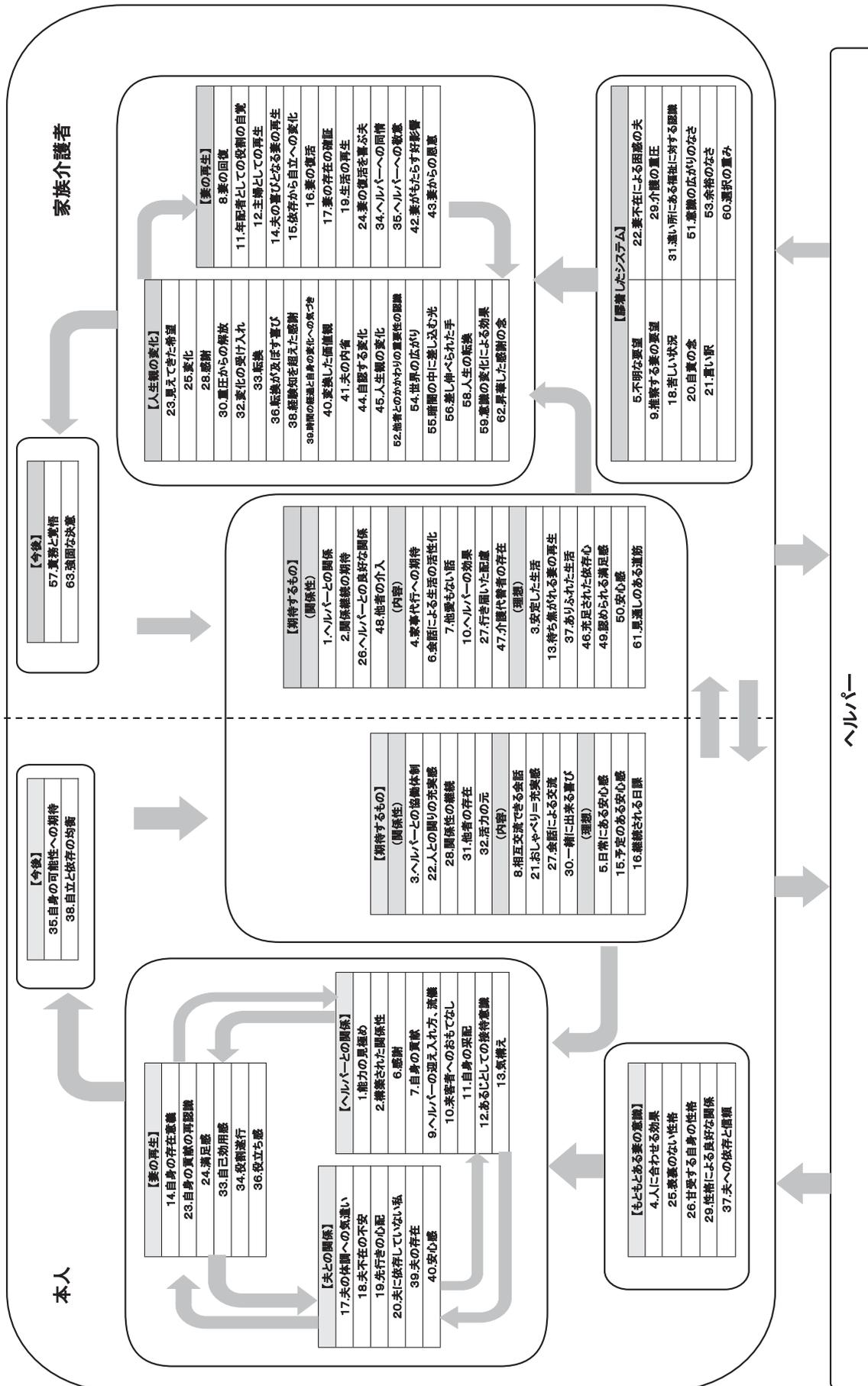


図 1 本人・家族介護者のストーリー・ラインとヘルパーの関連図

ヘルパーの関連図」を作成した（図1）。図の中心には、本人と家族介護者で構成される一つの家族として囲った四角がある。またその家族全体に関わる専門職として、下部にヘルパーを置いた。図の左側にある本人については、【もともとある妻の意識】と、【夫との関係】や【ヘルパーとの関係】と自身の【妻の再生】などの交互作用で、自身の【今後】を見つけることに至り、そのためになされる、あるいは、なされてきたヘルパーに【期待するもの】というニーズとなった。それは家族内での交互作用、ヘルパーとの交互作用というように循環しておこなわれている。右側の家族介護者については、家族介護者が感じてきた苦しい介護についての過去の話として語られる【膠着したシステム】から、色んな人との関わりを通して【人生観が変化】し、【妻の再生】も確認できるようになり、家族介護者が今思う【今後】へとつながり、その為になされる、あるいは、なされてきたヘルパーに【期待するもの】というニーズとなった。

#### IV. 考 察

ここでは、ストーリー・ラインに登場する〈テーマ・構成概念〉である下線の部分を〈 〉で示し、考察していく。

##### 1. 本人が望む安心感のある日常生活へのヘルパーの寄与

本人については、自身が自身でないような疾病による大変さ乗り越えて、その間に、回復するための努力として持ち前の明るさと思い悩む両面をうまく調整しながら持病を持ちながらも、今日を過ごしているという状況でのインタビューだった。『表層の出来事の記述』であるテキストにおいて、病気のために何も出来ない状態で夫に依存してきた状況から、ヘルパーが入ることによって自分で積極的に家事を行うように変化してきたことが語られていた。一方で、『深層の意味の記述』として浮かび上がってきたのは、〈35. 自身の可能性への期待〉と、自立に対する信念と、夫からの自立、ヘルパーや夫に対する依存心との間を行きつ戻りつしながら、〈38. 自立と依存の均衡〉を保っているというストーリー・ラインだった。

【もともとある妻の意識】として、〈4. 人に合わせる効果〉や〈25. 表裏のない性格〉が〈29. 性格による良好な関係〉を作ると考えている。〈26. 甘受する自身の性格〉と〈37. 夫への依存と信頼〉を持ち、ヘルパーを迎え入れることとなる。妻は【ヘルパーとの関係】では、〈1. 能力の見極め〉、〈9. ヘルパーの迎え入れ方、

流儀〉で〈10. 来客者へのおもてなし〉をするという〈12. あるじとしての接待意識〉を持っている。〈13. 気構え〉を持ち〈11. 自身の采配〉で行うことにより、〈2. 構築された関係性〉が出来ると考えている。一方、【夫との関係】では、〈17. 夫の体調への気遣い〉があり、〈18. 夫不在の不安〉と〈19. 先行きの心配〉を持っている。しかし、〈20. 夫に依存していない私〉であったり、〈39. 夫の存在〉により〈40. 安心感〉を得ていたりもする。ここでは、夫に対する意識は揺れ動くものであり、ヘルパーへの意識は関係性を構築しようとする主体的な前向きなものであると見る事が出来る。

ヘルパーとの関わりの中では、介護されているというよりも「自分が主体となりやっている」感覚や体感であることから、〈23. 自身の貢献の再認識〉〈24. 満足感〉〈33. 自己効用感〉〈34. 役割遂行〉〈36. 役立ち感〉という【妻の再生】への原動力に繋がるものとなっている。これは、ジャーメインのいう「交互作用が適応的な方向に向かっているとき、人間の成長、発達、情緒的・肉体的な満足感が助長され、支えられる。そしてそのような満足のいく状態は、重要な他者、社会機関、政治的・経済的機構、政策によって、また、時間的、空間的、またその他の物理的な場によってもたらされる<sup>32)</sup>」ことと一致する。それは、依存してきた日常から、以前の生活への復活と呼べる作業だと考えられる。それに貢献しているのが、妻の〈12. あるじとしての接待意識〉に応え〈33. 自己効用感〉を醸成するための、妻に対するヘルパーの自立支援であると考えられる。生活援助を行っているだけでなく、妻がどのように自立に向かえるのかを考慮に入れた支援と考えることができる。中矢は、訪問介護員の思考と行為をインタビュー調査の分析により可視化し、「援助職者であることの意識化」「意向と課題の折り合い地点の模索」「主体性を促すための対処」「業務の効率化」の4つのカテゴリーから訪問介護員には「戦略的な思考や行為」の構造があると発表している<sup>33)</sup>。この事例においても、まさに、援助職者であることの意識化により主体性を促すための対処を行っていたのではないだろうか。

夫に依存してきた妻自身が〈20. 夫に依存していない私〉という夫との関係性を思う時、〈38. 自立と依存の均衡〉を保ちながら、〈35. 自身の可能性への期待〉となり、〈14. 自身の存在意義〉を再確認する作業が繰り返される。ヘルパーは生活援助を通して、妻の〈14. 自身の存在意義〉と〈35. 自身の可能性への期待〉が大きくなるように、それらの作業の援助を行っている。それは小嶋らの述べる「喜びや楽しみ、快適さ、安心感、生きている実感、連帯感など人間としてさまざまな肯定的

な感情を醸成する<sup>34)</sup>」こととなる。潜在的可能性に関わり、援助媒体の一つとしてシステムの一因となり環境を整える。

そのようなヘルパーに【期待するもの】は、〈8. 相互交流できる会話〉〈27. 会話による交流〉であり、〈21. おしゃべり=充実感〉を得ることである。家事を〈30. 一緒に出来る喜び〉は、〈16. 継続される日課〉であり、〈5. 日常にある安心感〉〈15. 予定のある安心感〉〈6. 感謝〉をもたらす。それらは〈3. ヘルパーとの協働体制〉〈7. 自身の貢献〉がもたらす〈22. 人との関わりの充実感〉〈32. 活力のもと〉となる。ヘルパーは生活援助をしながら、生活者の視点で本人と波長をあわせていく。同じ生活者の視点でみるものは世界を同じくし、居心地の良さが存在するのではないだろうか。ヘルパーに【期待するもの】が〈28. 関係性の継続〉であるということは、〈31. 他者の存在〉としてコミュニケーションを行うことが、妻の〈30. 一緒に出来る喜び〉である家事や〈27. 会話による交流〉の渴望を充たし、自立支援に繋がっていることを示していると考えられる。それらが〈5. 日常にある安心感〉をもたらすところにヘルパーの寄与するところがあると考察する。

以上から、本人がヘルパーに望む支援としては、図1にあるように、【期待するもの】としての項目が見いだされた。ストーリー・ラインからは、それらに関わるヘルパーの姿や、「本人と家族介護者とヘルパーの関係性からみる自立への回復プロセス」が得られ、そのプロセスに寄与しているヘルパーの存在意義が見いだされた。

## 2. 家族介護者を通して見るヘルパーの存在意義

家族介護者については、仕事中心だった自分に妻の介護が現実のものとなり、大変な時間が長くあったが、今乗り越えてきて安定に向かおうとしている状況でのインタビューとなった。『表層の出来事の記述』であるテキストにおいては、介護が過重であったこと、福祉の関係者と関わっていく中で見方が変わったこと、変化に対応していく覚悟、今後の展望などが語られていた。分析したテキストの『深層の意味の記述』であるストーリー・ラインでは、他者が入ることによって自分たちがどのように変化していったのか、ヘルパーの意義などを認識していく、そして妻の存在を改めて認識し、家族がどのようにしていけばいいのかを考えるようになるというストーリー・ラインとなった。希望するサービス内容の細かなことというよりも、妻の自立を促すこととなったヘルパーとの関係性の継続がヘルパーに望むものであった。

本田ら<sup>35)</sup>や木村ら<sup>36)</sup>などに見られるように男性介護者

の困りごととして、食事支度があげられる。家族介護者は、〈4. 家事代行への期待〉をしつつも妻の要望は何であるかを考えた時に、〈6. 会話による生活の活性化〉ではないかと考える。〈7. 他愛もない話〉により妻が元気でいることを望む。そして、〈16. 妻の復活〉を、ヘルパーと一緒にやる家事をしている姿にみる。林<sup>37)</sup>は、夫婦間介護における適応過程を明らかにしているが、その中で、夫介護者が介護役割を形成するプロセスにおける相互作用において、家父長制の家族規範がある中で「介護役割規範によって規定されていない夫介護者にとっては介護役割を自分のものとして再規定する必要があった」としている。家族介護者は〈29. 介護の重圧〉から〈30. 重圧からの解放〉へといたる過程において、それらを再規定したと考えられる。しかし、家族介護者にとっての〈16. 妻の復活〉は、家事をしている姿である。自分はんこな昔かたぎな仕事人間だとの話からも、介護役割を自分の物として再規定しきれない所であるのかと考察する。

家族介護者の〈31. 遠い所にある福祉に対する認識〉が近くに存在するようになるのは、〈32. 変化の受け入れ〉によって、〈56. 差し伸べられた手〉が〈55. 暗闇の中に差し込む光〉となり〈23. 見えてきた希望〉へとつながる時である。それは福祉関係者の関わりがちょうど家族介護者の〈30. 重圧からの解放〉を求める時に行われる中で〈45. 人生観の変化〉を自覚するに至る。そして、ヘルパーの関わりにおいて、〈37. ありふれた生活〉を望むようになる。【妻の再生】について、妻が重い病状にあり介護が大変だったころから自立へとむかう過程で、妻の〈15. 依存から自立への変化〉を認めており、その変化が〈26. ヘルパーとの良好な関係〉からもたらされていることへの〈28. 感謝〉がある。妻がヘルパーと一緒に家事をすることにより、〈12. 主婦としての再生〉が行われることは、〈10. ヘルパーの効果〉〈42. 妻がもたらす好影響〉〈41. 夫の内省〉などの交互作用により〈45. 人生観の変化〉へとつながる。妻を主婦としてみる家族規範の中で、第三者が入ることがなければ、行うことがないかもしれない〈17. 妻の存在の確証〉が行われる。しかし、それは主婦としての姿だけでなく、〈13. 待ち焦がれる妻の再生〉〈43. 妻からの恩恵〉の交差に見られるように役割としての主婦としてだけでなく、妻自身の再生として捉えることができる過程である。援助媒体としてのヘルパーは、環境を変えていくこととなり、妻への生活援助が、夫と妻の関係性にも影響を及ぼし、夫婦の関係性に変化をもたらす。

プロセスの終盤では、【膠着したシステム】から、【妻の再生】【人生観の変化】へのストーリー、そして、【今

後】の決意を語ることになる。〈57. 責務と覚悟〉〈63. 強固な決意〉は様々な要素がまじりあい、夫婦の在り方の見直しやヘルパーの意義も含め、介護を通して得るものは、みんなに感謝しながら、これからも頑張るって生きていくという決意に集約される。それは、家族介護者の意識にあるのが、一瀬<sup>38)</sup>が述べる「介護に付与する肯定的価値の形成要因」となる「被介護者への愛着」や、「介護を通じて得た新たな人生に対する洞察」であると考察出来る。それらは、今までの妻との関係性がもたらしたものであり、〈48. 他者の介入〉による〈52. 他者との関わり的重要性の認識〉をすることから始まる〈19. 生活の再生〉に続いていく。

それらのことをもたらす〈8. 妻の回復〉を援助するヘルパーに【期待するもの】としては、〈1. ヘルパーとの関係〉の〈2. 関係継続の期待〉、〈37. ありふれた生活〉を継続できるための〈27. 行き届いた配慮〉などの援助、〈46. 充足された依存心〉となる〈47. 介護代替者の存在〉としての役割である。それは、家族介護者への直接的な支援ではない。しかし、妻への生活援助という支援が夫婦関係を見直す契機となり、〈37. ありふれた生活〉〈3. 安定した生活〉〈50. 安心感〉という希求を充たすものとして、〈19. 生活の再生〉に向けて協働するヘルパー、本人、家族介護者の相互作用からもたらされる家族介護者支援であることを意味すると考察する。

家族介護者のストーリー・ラインから得られたのは、「家族介護者の人生観が他者との関係性の中で変化へと至るプロセス」であった。

本人と家族介護者のストーリー・ラインのテーマ・構成概念は深層にある二人の意識の流れのストーリーであるが、それぞれのテーマ・構成概念は交互作用による関係性の変化として図1に示されていたと考える。インタビューの流れにそって深層にあるテーマ・構成概念を分析したのであるが、結果として、それらは図のように流れのあるものとして整理された。ストーリー・ラインの妥当性は概ね確保されたのではないかと考察する。

### 3. まとめ

今回の事例でヘルパーに期待されているものは、日常にある安心感をもたらしありふれた生活を一緒に具現化していくヘルパーとの関係性の継続であった。本人と家族介護者が「ヘルパーに望む支援について」語ったことは、自分たちがどうありたいかについて思っていることに伴走してくれる存在であるということではないかと考察する。赤塚が述べるように「生活の主体が生活を考え生活すること」に寄り添い、田中の述べるように「個人

のみならず家族全体の生活に隙間なく連続的にかかわり」続けた結果であろうと考える。ヘルパーは、他者の存在として、生活者の視点を持って生活者の営みの中に入っていた。

今回の事例からは「生活援助をすることにより関係性の変化をもたらすヘルパーの存在意義」が示唆された。それは、生活援助というサービスが専門性を持った支援者によって行われることで可能になると考察する。

## V. 今後の課題

本研究においては、協力者のご夫婦が利用している他のサービスや他職種による支援効果などが明確に測られていないため、ヘルパーによる支援効果であると断定できない点や、SCAT という分析方法に依っただけの結果であり、この研究の信頼性および妥当性には限界があると言わざるを得ない。

今回の調査時において、同時に本事例の担当ヘルパー、担当する他職種へのアセスメントに関するインタビューも実施している。それらの分析を行い、利用者、家族介護者のニーズに対してどのようなアセスメントが実施されていたのかについての分析を行い考察していく予定である。今後さらなるヘルパーの家族介護者支援の研究を進めていきたい。

### 謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

### 引用文献

- 1) 厚生労働省「介護予防・日常生活支援総合事業の基本的な考え方」(<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000192996.pdf> 20200502 閲覧)
- 2) 厚生労働省「第152回社保審-介護給付費分科会 H 29.11.22 資料1」([https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu\\_Shakaihoshoutan-tou/0000185792.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutan-tou/0000185792.pdf) 20200502 閲覧)
- 3) 厚生労働省「第176回社保審-介護給付費分科会 R 2.3.16 資料2」(<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000608309.pdf> 20200502 閲覧)
- 4) 赤塚朋子「今、なぜ、生活支援職が必要か」『日本家政学会誌』66(10)、2015年、541-547頁
- 5) 厚生省老人保健福祉局老人福祉計画課長「老計第10号 訪問介護におけるサービス行為ごとの区分等について」平成12年
- 6) 厚生労働省老健局振興課長「老振発0330第2号『訪問介護におけるサービス行為ごとの区分等について』の一部改正について」平成30年
- 7) 前掲4) p 544
- 8) 田中由紀子「訪問介護における生活援助の役割」『京都

- 女子大学生生活福祉学科紀要』第 1 号、平成 17 年、53 頁
- 9) 八田和子「訪問介護における家事援助の実態と自立支援の課題－訪問介護利用者・訪問介護員調査をふまえて－」『創発 大阪健康福祉短期大学紀要』第 2 号、2004 年、60-69 頁
- 10) 菊池いづみ「家族介護支援の政策動向－高齢者保健福祉事業の再編と地域包括ケアの流れのなかで－」『長岡大学地域研究センター年報』Vol.12、2012 年、55-75 頁
- 11) 柴崎祐美「地域包括ケアシステムにおける家族介護者支援の現状と課題－介護保険事業計画を手がかりにして－」『立教大学コミュニティ福祉研究所紀要』第 5 号、2017 年、37-49 頁
- 12) 藤崎宏子「訪問介護の利用抑制にみる『介護の再家族化』－9 年目の介護保険制度－」『社会福祉研究』2008 年、第 103 号、10 頁
- 13) 中野いづみ「『介護の社会化』と介護保険制度」『静岡福祉大学紀要』第 7 号、2011 年、58 頁
- 14) 湯原悦子「家族介護者支援の理論的根拠」『日本福祉大学社会福祉論集』第 130 号、2014 年、1-14 頁
- 15) 梶原弘平、荒井由美子他三名「認知症高齢者の家族介護者の介護負担感に着目した簡便な支援とその効果」『日本認知症ケア学会誌』第 17 巻、第 4 号、2019 年、718-725 頁
- 16) 小川栄二「ホームヘルプ労働のあるべき姿と改善課題」河合克義編著『ホームヘルプの公的責任を考える』あけび書房、1998 年、107 頁
- 17) 須加美明「ホームヘルプサービスとソーシャルワークの共通性と固有性－ソーシャルワークとケアワークの共通基盤に向けて」『長野大学紀要』21(1) 1999 年、37-46
- 18) 大和田猛「ソーシャルワークとケアワーク」『ソーシャルワークとケアワーク』中央法規出版、2004 年
- 19) 鳥海直美「地域ケアシステムにおけるホームヘルパーの役割の再検討～ソーシャルワーク機能に焦点をあてて～」『千里金蘭大学紀要』2004 年、1-7 頁
- 20) 安井理夫「福祉・保健・医療の連携におけるソーシャルワークとケアワーク」大和田猛編著『ソーシャルワークとケアワーク』中央法規、2004 年、293 頁
- 21) 松本真美「研究動向から見るホームヘルパーの専門性に関する一考察」『関西福祉科学大学紀要』第 21 号、2018 年、47 頁
- 22) 大谷尚『質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで』2019 年、名古屋大学出版会、166 頁
- 23) Carel B. Germain “An ecological perspective in casework practice”, *Social Casework*, 54-6, 1973, p.327／小島蓉子編訳『エコロジカル・ソーシャルワーク－カレル・ジャーメイン名論文集－』学苑社、1992 年、11 頁
- 24) 小島蓉子編訳『エコロジカル・ソーシャルワーク－カレル・ジャーメイン名論文集－』学苑社、1992 年、187 頁
- 25) 前掲 22)
- 26) 前掲 22) 300, 310 頁
- 27) 前掲 22) 271 頁
- 28) 高橋知也、小池高史、安藤孝敏「高齢期の被援助志向性に影響を与えるライフイベントは何か－SCAT による内容分析を用いた検討から－」『技術マネジメント研究』2018 年、17 巻、20-30 頁
- 29) 柊崎京子、楠永敏恵、鈴木聖子「経験 5 年以上の介護福祉士における認知症ケアの判断内容」『帝京科学大学紀要』2018 年、Vol.14、95-102 頁
- 30) 亀崎美沙子「保育士の役割の二重性に伴う保育相談支援の葛藤－親・子の相反ニーズにおける子どもの最善の利益をめぐる－」『保育学研究』2017 年、第 55 巻第 1 号、68-79 頁
- 31) 前掲 22) 359 頁
- 32) 前掲 24) 188 頁
- 33) 中矢亜紀子、藤原るか「訪問介護員が生活援助のなかで行う戦略的な思考と行為」『学苑・人間社会学部紀要』No.952、2020 年、47-58 頁
- 34) 小嶋章吾、寫末憲子「ケアワークにおける生活場面面接に関する一考察－介護保険下のホームヘルプにおける『ケアワーク面接』－」『介護福祉学』7(1)、2000 年、28 頁
- 35) 本田亜起子、村嶋幸代「高齢夫婦のみ世帯の夫介護者における食事の支度の困り事に関する研究」『日本地域看護学会誌』Vol.10、No.1、2007 年、93-99 頁
- 36) 木村麻紀、谷垣静子「『在宅で介護する男性介護者のアイデンティティ』の概念分析」『吉備国際大学研究紀要』第 28 号、2018 年、1-8 頁
- 37) 林葉子『夫婦間介護における適応過程』日本評論社、2010 年、140 頁
- 38) 一瀬貴子「高齢配偶介護者の介護経験の基本的文脈－介護の肯定的価値と介護による否定的影響のパラドックス－」『家政学研究』Vol.97、2002 年、20-28 頁